

「グローバル化と歴史学」

高山 博
東京大学大学院人文社会系研究科教授
日本学術会議連携会員

現在進行しつつあるグローバル化は、時代を画する歴史の分水嶺となるだろう。日本という国を越える巨大なグローバル市場が生まれ、それが経済のみならず人間活動の諸側面に大きな影響を与えつつある。グローバル市場の統合の強化は、国ごとの社会的完結性の喪失と表裏一体の関係にある。これまで私たちは、独立し完結した社会をもつ主権国家の存在を前提に、世界をその集合体という具合に捉えてきた。しかし、現実はずでに、国民への影響力を低下させた国家と国境を越えて活動し大きな影響力を行使する様々な非国家組織が競合する世界へと移行している。人間活動のほとんどあらゆる領域がこのグローバル化の影響を受け、私たちの世界認識、活動の準拠枠は大きく変化することになる。歴史学の世界も今、大きな変容を遂げようとしているのだと思う。

歴史の枠組みの変化

政治・経済・文化など、さまざまな分野の活動が国の枠組みの中で行われ、人々がその枠組みの外の人とあまり接触しない状況下では、各集団がどのような価値観のもとで、どのような歴史像をいだき、どのような世界観をもっているかは大きな問題とならない。外国研究も、自分が生きている現実の世界とは直接つながらない別世界の話であり、事実の裏付けのない文化論や文明論を論じてあまり実害はなかっただろう。しかし、今日のように、異なる政治・文化集団が恒常的に接触するような状況下では、複数の歴史のあいだの齟齬や懸隔が大きな問題として浮上してくる。他の集団の歴史の中に自分たちの認識とは異なる像を見出し、自分たちのイメージや自分たちに関わる部分に関してその修正を強く求めることになる。これが、政治問題化すれば、国家間の深刻な対立を引き起こす。

グローバル化は、かつて様々な地域に広域政権が誕生した時や近代国民国家が成立した時と同じように、広い範囲にわたって統合と平準化を求めることになる。その結果、これまで作られてきた国ごとの歴史、あるいは、国の成立史をもとにした歴史は、大幅な修正を求められることになる。近代国民国家を主たる準拠枠として発展してきた近代歴史学は急速に力を失い、国境を越えた動きを整合的に説明できる歴史が強く求められるようになってきた。

必要とされる歴史

現在、新しい歴史の枠組みが必要とされているのは、単に、自分たちの位置を正当化したり、過去に対するお互いの認識のすりあわせを行うという政治的理由からだけではない。むしろ、私たち一人一人が、自分の生きる世界を認識するために、従来とは違った歴史像・世界観を必要としているからである。日本に住むか否かにかかわらず、私たちは、現実の世界の動きを説明できる歴史を必要としている。

テクノロジーの進展により、人間の活動域は驚異的に拡大したが、自らの住む社会の状況を把握するのは非常に難しい状況にある。すでに、私たちは、自分が属する日本社会を把握するのが困難な状況にいるが、グローバル化は、その把握をいっそう困難にする。グローバル化した世界では、さまざまな要素が国境を越えて複雑に結びついているため、国境内の動きだけ見ていると、その動きを理解することができないからである。結局、自分の生きている日本社会の動きを把握するために、日本という枠組みを越えて展開するグローバル化した世界の動きを把握しなくてはならないことになる。

現在の日本社会の動きは日本だけを見ても理解できないし、説明できない。私たちは、グローバル化した世界の一部として日本を認識し、その中に自分を位置づける必要がある。流動性が高まり、国境が弱くなり、かつての閉じた日本社会がもはや存在していないことを認識する必要がある。この現実から目をそむければ、結局、私たちの周りで生じている事柄の因果関係を見極めることができず、未来が見えないどころか、現実の社会の変化が見えず、絶えず不安の中で生きていかなければならないことになる。

このような大きな変化の時代には、人間の長い歴史を扱ってきた歴史学が、将来への羅針盤の役割を果たさねばならない。人間社会を扱う学問には、様々なものがある。物事が安定し枠組みが変わらない状況での分析を得意とする静態的な学問もあれば、歴史学のように、社会の枠組みそのものが大きく変動する状況での分析を得意とする動態的な学問もある。歴史学は、所与のものとされている枠組みの変化自体も分析の対象とし、変動する社会や世界の方向性を見据えることのできる学問だということを忘れてはならないだろう。

新しい世界史の枠組み

したがって、歴史学への社会的要請という見地からすれば、必要とされているのは、現在の私たちの位置を教えてくれる歴史であり、現在の国際社会の動きを説明することので

きる歴史である。それは、ヨーロッパが拡大していく歴史やヨーロッパを先頭に人類が進歩していく歴史という単線的な歴史では、もちろん、ない。

複数の国家、様々な文化圏、多様な人間集団を包含する世界史、いわば、私たち人類全体の歴史と言えるような歴史像である。たとえ、お互いに直接的な接触や交流がなくとも、地球上に存在していたさまざまな人間集団や国々がどのような社会を築き、それをどのように変化させてきたのか、それらの人間集団や国々のあいだの関係がどのように変化してきたのか、を説明できる複線的な歴史である。それは、地球上で活動してきた人類を一体とみなし、その構造や内部関係の変化を重視する人類の全体史だと言うこともできる。アジアの歴史も日本の歴史も、その人類の歴史という文脈の中で問い直されざるを得ない。

このような新しい世界史を構想する場合に最も重要なことは、たとえば、日本史、イギリス史、フランス史のように、あるいは、「ヨーロッパ史」、「イスラム史」のように、過去から現在まで連続する人間集団の存在を自明のものとし、それらの人間集団の歴史を束ねた世界史像を作ろうとしてはならないということである。フランスの民族的起源と同一視される「フランク人」という民族名は、民族集団の連続性の象徴として用いられてきたが、それが指し示す中身は時代によっても、それを使う人によっても異なり、中世から現代にいたる特定の民族集団の連続性と一体性を想定することはできない。もちろん、日本列島に住んでいた人々を一つの「日本人」集団とみなし、その集団の連続性と一体性が古代から現代まで保たれていたと考えることもできない。

私たちは、まず、人類全体の歴史のなかで、どのような人間集団の存在が想定されるのか、どのような人的集団の枠組を設定するのが適切なのかを考えることから始めなくてはならない。この基本的枠組みの再検討なしに、近代歴史学の軛から自由になり、私たちが必要とする世界史像を手にはできないだろう。それぞれの人間集団を規制していた政治・経済・社会のシステムや価値の体系の違い、あるいは、異なる人間集団の間の共通の性向、想定された異なる人間集団の関係の変化を探ることが重要になることはいうまでもない。

<参考>

高山博『ハード・アカデミズムの時代』講談社 1998

高山博『歴史学 未来へのまなざし』山川出版社 2002

高山博『<知>とグローバル化』勁草書房 2003

高山博「グローバル化する世界と歴史学」『史学研究』248号（2005）

高山博「やさしい経済学～「社会科学」で今を読み解く：歴史から見る現代、①～⑪」『日

本経済新聞』朝刊 2009 年 10 月 5 日（月）～21 日（水）
パトリック・ギアリ／鈴木道也他訳『ネイションという神話』白水社 2002

（『学術の動向』2011 年 10 月号、34－36 頁）